映画『風と共に去りぬ』トリヴィア
――画面に見るアメリカ南部の歴史と文化――（1）

中　村　紘　一

はじめに

マーガレット・ミッチェルの小説『風と共に去りぬ』（1936）は、アメリカ南北戦争勃発の1861年から戦後の再建時代の1873年までの12年間に、南部生まれの女主人公スカーレット・オハラがいかにして思春期の16歳から戦争に深く巻き込まれながら恋愛・失恋・結婚・出産・別離を経験して28歳の成人に至ることになったかその成長の過程を描いた作品である。

映画『風と共に去りぬ』（1939）はミッチェルのこの小説をデイヴィド・O・セルズニック（1902-65）が制作したもので、監督はジョージ・キューカー（1899-1983）やサム・ウッド（1883-1949）が一時携わったこともあったが、ほとんどはヴィクター・フレミング（1883-1949）がつとめた。脚本はシドニー・ハワード（1891-1939）が手がけた。この脚本は制作途中何人かが手直しして適切な長さに縮められたが、シドニー・ハワードはこの映画でアカデミー脚本賞を受賞した。音楽は生涯200本を超える映画音楽を作曲したマックス・スタイナー（1888-1971）。

本稿は映画『風と共に去りぬ』の画面（スナップ）を切り取って、そこに見られる映像から旧南部、南北戦争、再建時代のアメリカ南部の歴史と文化を読み取ろうとするものである。この映画はドキュメンタリではなく劇映画であるから、歴史・文化と言っても、当然のことながら、そこには原作者、脚本家、監督などの意図や偏見が色濃く反映されている（かりにドキュメンタリであったとしても、撮影者の主観を排除して完全に客観的であることは不可能であ

る)。それらは南部人の自らの文明に対する誇り、戦争の大義、(ほとんどの戦闘が南部で行われたがゆえの)惨状、敗戦の屈辱と悲惨、ヤンキー(北軍、北部人)への憎悪といった形で表現されている。南部娘だったスカーレット・オハラが成長する時の描き方も同じである。いやでも戦争に巻き込まれ、アシュリーとの恋に破れ、レット・バトラーに見捨てられるという挫折を経験しても彼女には最後に生きる縁としてタラの大農園と土地があったという。土地に対する執着、これほど南部女らしいものはないという作者、脚本家、監督たちの考えが鮮明に読み取れるのである。

第1部　タラ・プランテーション

画面1　"The Story of the Old South"「オールドサウス」(the Old South)とは?

4時間近いこの映画は最初「序曲」(overture)が流れ、そのあとクレジットが始まる前にこの画面MARGARET MITCELL'S STORY OF THE OLD SOUTH(マーガレット・ミッチェルによるオールドサウスの物語)とタイトルGONE WITH THE WINDが映し出される。

「オールドサウス」(旧南部)とは、地理的には、アメリカ合衆国建国時(1776)13州のうち南に位置していたヴァージニア州、ノースカロライナ州、サウスカロライナ州、ジョージア州、デラウェア州とメリーランド州の6州を指していう。他に「深南部」(Deep South)の区分けがあるが、これはアラバマ

州、ルイジアナ州、サウスカロライナ州、ミシシッピ州を指す。さらに北部との境界州にケンタッキー州、南部周辺州にフロリダ州、テキサス州がある。

『風と共に去りぬ』の作者マーガレット・ミッチェルはジョージア州アトランタの出身であり、女主人公スカーレット・オハラの育った大農園の所在地をアトランタ近郊に設定している。

さらに、「オールドサウス」は、文化・社会的には、「南北戦争前」（antebellum、ラテン語で*ante* = before, *bellum* = war）のアメリカ「南部同盟（連合）」（the Confederacy）の社会・文化を意味し、そこでは南部人口比でごく少数の白人大農園主たちが特有の豊かで優雅な風習や様式の生活を営み、敗戦後も、彼ら（とりわけ女性たち）は戦前の伝統を維持しようと努めた。

これら南部白人は「オールドサウス」という言葉を自らの栄華の記憶を留めるものとして懐旧の念を込めて使った。一方、黒人たちには、それは戦前の大農園を支えた奴隷制度を思わせるものであった。

画面1の背景では、一面の綿畑で黒人奴隷たちが綿花栽培の野良に従事している。ジョージア州のこの地方の地質を作者ミッチェルは次のように述べている。

> （ジョージア州のこの地方は）「野蛮なほど土の赤い土地だった。雨あがりには血のようになり、ひでりには煉瓦の灰のようになった。しかし、それは世界で最適の綿花栽培地であった。白い家、たがやされた平和な畑地、ゆるやかに流れる黄色くにごった川など、気持のよい土地であった…」（小説第1部第1章）。

参考資料　現在のアメリカ合衆国地図

画面2　タイトルGONE WITH THE WIND（『風と共に去りぬ』）の意味

『風と共に去りぬ』のタイトルは、作者ミッチェルがイギリスの詩人アーネスト・ダウスン（Ernest Dowson, 1867-1900）の詩「シナラ（“Non Sum Qualis eram Bonae Sub Regno Cynarae”）」の第3連の1行目を借用したものである。ダウスンの詩のラテン語のタイトルの意味は "I am not what I was, under the reign of the good Cynara"（「シナラの御代にあっては、わたしはかつてのわたしにあらず」）で、これはホラティウス *Odes*, IV,1からの引用。ダウスンの「シナラ」の箇所はこうある。

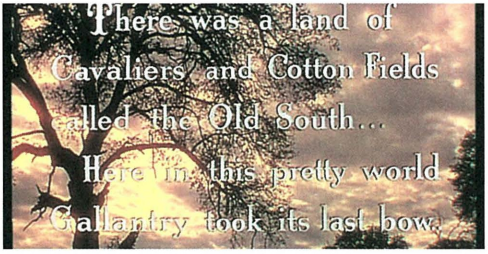
I have forgot much, Cynara! gone with the wind,
Flung roses, roses riotously with the throng,
Dancing, to put thy pale, lost lilies out of mind;

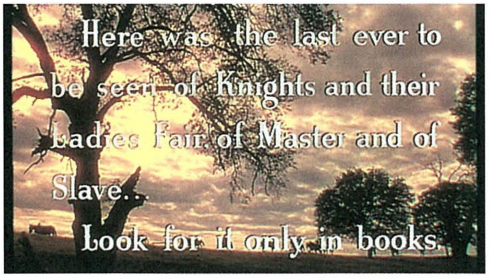
私は多くを忘れ果てた、シナラよ！風とさすらい、
遊び仲間と狂おしく薔薇を、薔薇を投げ、踊っては、
還らぬ君の青ざめた百合を心から追いやった。

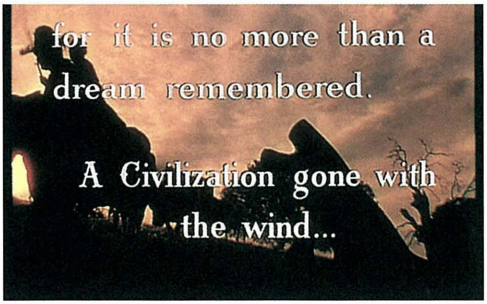
（南條竹則訳『アーネスト・ダウスン作品集』岩波文庫）

この詩では、“gone with the wind”の意味は（I have gone with the wind）、私は「風とさすらった、風まかせに行った」という意味（南條氏の解釈）であるのに対して、ミッチェルの作品の題の意味は、a civilization（Tara）is gone with the wind,「ひとつの文明（タラの大農園）が風（戦争）と共に去って しまって今はもうない」である。この場合は、Cynara who is “gone with the wind”という読み方になる。そして、Cynaraは旧南部文明（タラ）の譬喩。

画面3　「ひとつの文明が風と共に去った」







クレジットが終わってドラマが始まる前に、画面3の序言（foreword）が映し出される。

There was a Land of
Cavaliers and Cotton Fields
Called the Old South…
Here in this pretty world
Gallantry took its last bow.
Here was the last ever to
be seen of Knights and their
Ladies Fair, of Master and of
Slave…
Look for it only in books,
for it is no more than a
dream remembered.
A Civilization gone with
the wind…

綿畑の広がる、騎士たちの
「旧きよき南部（オールド・サウス）」と呼ばれた
国があった。
ここ、この美しい世界で

華やかな騎士道が最後の別れを告げていった。
　ここで、騎士たちと麗しき貴婦人たちの
そして、主人と、奴隷の
見納めとなった。
　今、その国を訪ねる場所は書物のみ、
それはもはや記憶に残る
夢にすぎないからだ。
　ひとつの文明が風と共に
　　去ったのだ。

この序言は脚本を担当したシドニー・ハワードが書いたものである。彼はcavalier, gallantry, knight, ladyなどの西欧中世の騎士階級に言及する言葉を使用して旧南部文明の特徴を指摘している。

なお、これに関しては、William R. Taylor, *Cavalier and Yankee: The Old South and American National Character*（1957）という名著がある。

画面4　ドラマは「タラ」に始まって、「タラ」で終わる。映画最初のシーンは「タラ大農園」（スカーレット・オハラの生まれ育ったプランテーション）の大邸宅に始まる（ちなみに、マーガレット・ミッチェルがタラ大農園のモデルにしたのはジョージア州アトランタ近郊のジョーンズボロに実在したプランテーションであった）

19世紀初頭、スカーレットの父ジェラルド・オハラGerald O'Hara（現60歳）は、21歳の時に故国アイルランドからジョージア州サヴァナにやってきた。徹夜のポーカーで、アトランタ近郊の640エーカー（甲

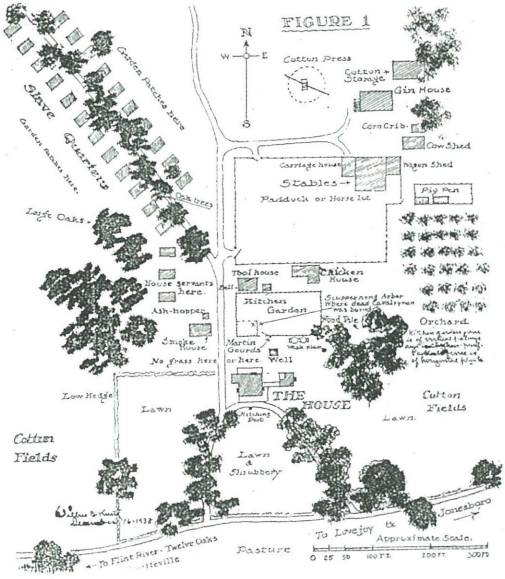
子園球場の約65倍）の土地を不在地主からせしめたのをきっかけに農園主になることを決意、古代アイルランド諸王の砦 [玉座] があったアイルランド、ダブリン近くにあるタラ（Tara）の丘にちなんで農園を「タラ」と名付けた。その後、兄たちや銀行から資金を調達、奴隷を購入して、この農地を綿花大農園（cotton plantation）に成長させた（ちなみに、O'Hara などO'で始まる姓はアイルランド系の姓で「…の息子 [子孫]」の意）。

画面4は「タラ・プランテーション」の農園主家族（オハラ家）が住む大邸宅。農園主家族の大邸宅（plantation house）を一般に「マンション」mansion、奴隷たちの住居を「キャビン」cabinと言った。

参考資料

『風と共に去りぬ』の時代考証を担当したアトランタ在住の地方史家・画家ウィルバー・ジョージ・カーツ Wilbur George Kurtz（1882-1967）は「タラ・プランテーション」概念図を制作している。

小さくて見づらいが、中央やや下のTHE HOUSEとあるのが、オハラ家の農



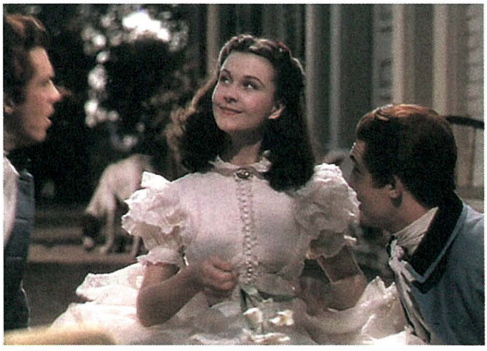
Wilbur Kurtz drew up this plot plan of Tara and its environs from descriptions provided by Margaret Mitchell. It played an important part in giving a proper sense of direction in the staging of all of the scenes at the

園主大邸宅（マンション）で、道路を隔てて北西に植えられている10本余りの樫の木（オーク・ツリー）を挟んで奴隷たちの住まいである20軒余りの小屋（キャビン）が並んでいる。これがSlave Quarters（奴隷宿舎）である。ちなみに、図下の東西に伸びる道路には、西方向に進めば隣の大農園 "Twelve Oaks"（「トウェルヴ・オークス、12本の樫の木」）に至るとある。

画面5　画面は、満開のサクラ（？）越しに覗くタラの大邸宅のベランダに移る

桜に見えるのは実はハナミズキ（dogwood）である。いずれにしても春であることに違いない。小説からは、その日が南部によるサムター要塞砲撃（1861年4月12日）の翌々日であることがわかる。

画面6　スカーレット・オハラ（16歳）登場



ベランダには、男2人女1人の若者たち。後ろ姿の若者が左に退くと、隠されていたスカーレト・オハラの顔がクロースアップで現れる。「その顔には、ジョージア州沿岸に見られたフランス貴族末裔である母親の繊細な顔立ちと、赤ら顔のアイルランド人である父親の粗野な顔立ちがくっきりと混じり合っていた」。「ドレスは、このあたりの3郡で1番細い17インチの腰を完璧に浮き立たせ、ぴっちりとしたバスク（短上衣）は16歳にしてはよく成熟した胸のふくらみを見せていた」（小説第1部第1章）。

スカーレットを挟む2人の若者は近くのタールトン家の19歳になる双子ブレントとスチュアート。2人は開口一番「大学を退学になっても平気さ。今にも戦争が起こりそうなのだから、大学をやめたんだ」と戦争を話題にする。スカーレットは戦争に何の関心もなくその話題にはうんざりなのだ。しかし、皮肉なことに、これから始まるのは、彼女が戦争に巻き込まれていくドラマである。

タールトン家の双子の若者は、スカーレットに、隣の大農園「トウェルヴ・オークス」の後継者アシュリー・ウィルクスが従妹のメラニーと婚約したことを告げる。アシュリーを密かに思うスカーレットはショックを受け、何とかして自分がアシュリーと結婚したいと考える。彼女のアシュリーへの思いがここではドラマを構成するもう1つの要素であることが明らかにされる。

こうして、映画最初のシーンは、①（南北）戦争と②アシュリーへの思いという2つの要素がこのドラマを構成する重要な要素であることを窺わせる。見事な劇作術である。

タールトン家の双子の兄弟は乗馬服姿である。「乗馬が巧みなこと、射撃がじょうずなこと、踊りがうまいこと、やさしく婦人に奉仕し、一人前に酒がのめて酒席の相手がつとまること、彼らに必要なのは、これだけだった」小説第1部1章より）。これがknightの嗜みであり、gallantryであるための条件であった。ちなみに、スカーレットの父ジェラルドも「すぐれた馬術家」だった。

画面7　大農園で働く黒人奴隷たちが1日の仕事を終えて、家路につく牧歌的なシーン

画面7はタラ大農園の鐘楼。2人の黒人の子供が輪に載って「仕事の終わり」を告げる鐘を鳴らしている。

画面8のスクリプト　棉花畑。奴隷たちが畝を耕している。「仕事の終わり」を告げる鐘が遠くに聞こえる。奴隷の1人、エライジャが手を休める。

ELIJAH Quittin' time.

Another huge black slave, known as Big Sam, turns on Elijah sharply.

BIG SAM Who said?

ELIJAH I sez.

BIG SAM You can't sez. I'se de foahman. I'se de one dat sez when it's time to

quit.（*he calls to the other slaves*）

Quittin' time.

エライジャ「仕事―終わりだ！―」（大男の奴隷ビッグ・サムがエライジャを睨みつける）

ビッグ・サム「今のはどいつだ？」

エライジャ「オレだ」

ビッグ・サム「オマエじゃ駄目だ。親方はオレだ。オレが終わりの時間を告げるのだ」（他の奴隷たちに向かって）

「仕事―終わりだ！―」

註　foahman.=foreman=（*historical, US, during the era of slavery*）A black（slave）assistant to the white overseer who managed field hands.*OED* 野良仕事をする黒人奴隷たちの親方。白人の奴隷監督（overseer）の助手。

画面9　ドラマのテーマは「タラ」である――3度繰り返される重要なシーン、その1

その日の夕方、「トウェルヴ・オークス」から戻ってきた父ジェルラルドはアシュリーの婚約に落ち込むスカーレットを見て2人で丘に向かいながら、アシュリーとでは幸せになれない、南部人でお前と同じ考え方をする男なら誰と結婚しようと大差ないと諭す。そのわけは、

ジェラルド「わしが死んだら、（彼女がうわの空であるのを知りながら）タラをお前に譲るからだ」

スカーレット「タラなんか欲しくないわ。農園なんて何にもなりはしないわ、だって—」

ジェラルド（立ち止まり、憤然として）「ケイティー・スカーレット・オハラよ、タラが—あの土地が何にもならないと言うのか？」

（スカーレットは答えない。2人は周りの田園を見下ろす丘の頂上近くで立ち止まる。

ジェラルドは腕を突き出す）

＜2人の視点から見た、タラの豊かで美しい土地の長いパン・ショット＞

ジェラルドの声（続く）「土地こそそのために働く価値のある唯一のもの、死ぬ価値のある唯一ものなのだ—なぜなら、この世で永続する唯一のものだから」

＜ジェラルドとスカーレットの2人のショットに戻る＞

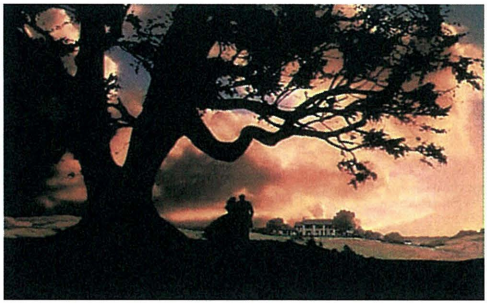
スカーレット（うんざりして）「まあ、パパったら、アイルランド人そっくりね」

ジェラルド「わしは誇りにしているのだ、アイルランド人であることを。お嬢ちゃん、お前にも半分アイルランド人の血が混じっているのを忘れるな」

＜全景のショットに戻る＞

ジェラルドの声（続く）「そして、体内にアイルランド人の血を一滴でも持つ者には、自分が住む土地は母親のようなものなのだ。ああ、だが、お前はまだほんの子供だ。やがてわかる時が来るだろう、土地に対する愛情を—アイルランド人である限りはそれから逃れられないのだ」

画面10　＜ジェラルドとスカーレットの後ろ姿を撮るリバース・ショット＞



（土地を見つめながら、ジェラルドはスカーレットを片腕で抱く。カメラは次第に後退して行き、最後にはジェラルド・オハラと娘が夕日の中で美しいタラの土地を見つめている小さなシルエットとなる。この間、この映画でタラのために作曲されたテーマ音楽（「タラのテーマ」）が伴奏される）

以上　スクリプトはシドニー・ハワード
　　音楽はマックス・スタイナー

画面11　奴隷監督（overseer）ウィルカーソンの社会的地位とルサンチマン

その晩遅く帰宅したエレン・オハラはタラの奴隷監督ジョーナス・ウィルカーソンと会って、彼がスラッター家の娘に妊娠させた不義の子の出産を手伝ってきたが死産したことを伝える。そして、夫のジェラルドに彼の解雇を求める。

一般に、大農園（プランテーション）における階層は、上から大農園主(plantation owner)、奴隷監督（overseer)、奴隷（slaves）に区分けされていた。大農園主は農園の経営を奴隷監督に大きく依存し、奴隷監督は奴隷の仕事を指揮・運営するために雇用されていた。通常、奴隷監督は白人であったが、白人の中では奴隷売買商人に次いで低い身分で、大農園では農園主が大邸宅（マンション）に住んだのに対して、奴隷監督は小さな住宅（small house）で、そして、奴隷はいわゆるslave quartersの丸太小屋（cabin）で生活した。また、奴隷監督は白人でありながら蔑まれていて、農園主らとの社交に加えてはもらえなかった。

（旧南部では南部人のほとんどが奴隷所有者でなく、またかりに奴隷所有者であってもその大多数が10人以下の奴隷しか所有していなかった。しかし、大農園主は農業労働力としてかなりの数の奴隷を所有していて、彼らはしばしば「エリート農園主（planter elite)」あるいは「貴族農園主（planter aristocracy)」と呼ばれた。彼らの割合は州や地域によって異なるが、土地所有者全体の4.5％、8％とかといわれるほど少なかった)。

ウィルカーソンを「郡で1番の奴隷監督」と考えていたジェラルドは妻の突然の要求に驚くが、その理由を耳打ちされて、「ヤンキーのウィルカーソンと貧乏白人のスラッタリー家の娘とが」（“The Yankee Wilkerson and the white trash Slattery girl”）と呆れ顔で嗤う。

ここで、ジェラルドが、ウィルカーソンがヤンキーであること、スラッタリー家が貧乏白人であることをわざわざ指摘しているのは、ヤンキーや貧乏白人を軽蔑してのことである。

「ヤンキー」とは、もとはニューイングランド6州（Connecticut, Massachusetts, Rhode Island, Vermont, New Hampshire, Maine）生まれの住民のことを意味したが、南北戦争の頃になるとその定義が広がって、北部の住民全体を指すようになった。農園主ジェラルドは、卑しい身分の奴隷監督に就いているウィルカーソンが南部に敵対する「ヤンキー」であることをことさら強調

しているのである。

一方、南部の「貧乏白人」は貧しく、教養もなく黒人奴隷にすら軽蔑されていた。スラッタリーの家族は低い沼沢地にわずか3エーカーの農地（タラ農園の200分の1、甲子園球場の20分の1）に暮らしていた。娘の名はエミー。エミーはチフスを罹病した時にもエレン・オハラに看護してもらうが、エレンは感染して死亡。エミーは、その後、ウィルカーソンと結婚して、南北戦争後は「カーペットバガー」（carpetbagger）の夫とともに、タラを買収するために訪れるが、スカーレットに追っ払われる。

小説では、解雇されたときのウィルカーソンの怨嗟は次のように書かれている。「ジョーナス（・ウィルカーソン）は南部の人間がすべてきらいだった。彼に対する南部人のよそよそしい丁重さを憎み、その丁重さの裏から明らさまに見える彼の社会的地位にたいする軽蔑を憎んだ。そして南部人のもつ、すべての憎むべきものの縮図として、エレン・オハラを、他のなにものにもまして憎んだ」（小説第1部第5章）。

画面12　カトリック教徒オハラ家の祈り

エレンは居間に入って、家族全員（夫、娘たち、黒人奴隷の召使たち）でお祈りを始める。アイルランド系のオハラ家はもちろんカトリックである。エレンはロザリオを手に、「告白の祈り」（confiteor）を唱える。「すべての聖人に告白します。わたしは思い、ことば、行い、怠りによってひどい罪を犯しまし

た。ゆえに、処女マリアさまに懇願します」(I confess … to all the saints that I have sinned exceedingly in thought, word, and deed, through my fault, through my fault, through my most grievous fault. Therefore, I beseech blessed Mary ever Virgin …)。

エレンは信心深いカトリック教徒として自らの良心を検討・反省するのを日課としていたが、この時のスカーレットは自分の心を検討した結果、アシュリーは自分が愛していることに気づいていないのではないかと考え、1つの策略を巡らす。

参考資料　ジョージア州の宗教

他の南部各州と同様、圧倒的にキリスト教プロテスタントが多い。2010年時点でジョージア州人口（9,687,653人）の宗教比率は次のとおりである。

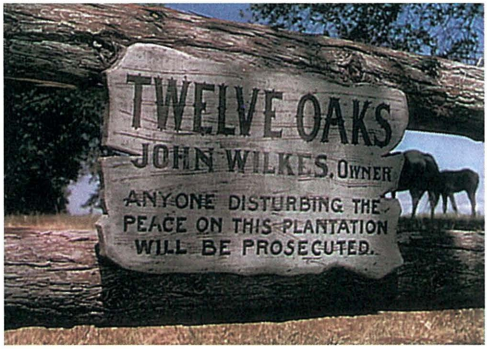
プロテスタント	70％（バプテスト24％、メソジスト12％、長老派教会3％、ペンテコステ派3％、その他のプロテスタント28％）
ローマ・カトリック	12％
他の宗教	3％
無 宗 教	13％

画面13 「タラ」よりも大きいウィルクス家の大農園「トウェルヴ・オークス」「トウェルヴ・オークス」の表札

TWELVE OAKS	トウェルヴ・オークス
JOHN WILKES, Owner	所有者、ジョン・ウィルクス
ANYONE DISTURBING THE	このプランテーションの
PEACE ON THIS PLANTATION	治安を乱す者は何人であれ
WILL BE PROSECUTED.	起訴される。

ちなみに、「タラ」の表札（スクリプトのみで、公開映画ではカットされた)。

TARA	タラ
POSTED. NO HUNTING	告。狩猟禁止
GERALD O'HARA, OWNER	ジェラルド・オハラ、所有者

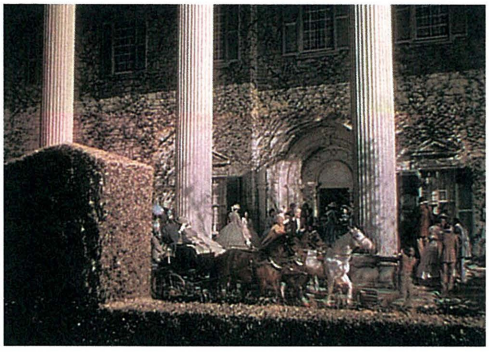


画面14　門柱から玄関までの道を12本の樫（オーク）の木が並ぶ

画面15　白い円柱の立ち並ぶ玄関に招待客を乗せた馬車が次々と到着する

翌日、ジェラルドと娘たちは、ウィルクス家の「バーベキュ」パーティに招待される。ウィルクス家のプランテーションは大邸宅（マンション）の敷地に植えられた12本の樫の木にちなんで「トウェルヴ・オークス」と名付けられた。その邸宅はタラのそれよりもはるかに大きく豪華であった。「丘をのぼると、均

整のとれた白い建物が目の前にあらわれた。高い円柱、ひろびろとしたベランダ、平たい屋根、それはあたかも自分の魅力に自信をもち、そのためすべての人にたいして寛容で親切な貴婦人のように美しかった。スカーレットは、タラ以上に、このトウェルヴ・オークスが好きだった。なぜなら、そこにはジェラルドの邸宅には見られない荘厳の美と円熟した品格があったからだ」(小説第1部第6章)。この円柱を備えた白亜の建物は古代ギリシャ神殿を思わせて、南部プランテーションに典型的なマンションの中でも一際美しい。



ウィルクス家は農園の大きさ、奴隷の数など郡で2番目に富裕な一族で、現在の農園主ジョン・ウィルクスは妻に先立たれたが、成人した息子アシュリーと2人の娘がいる。アイルランド人ジェラルド・オハラに粗野なところがあるのに対して、ジョン・ウィルクスは洗練されていて読書や音楽・絵画を好んだが、これはウィルクス家がヴァージニア州出身であったからかも知れない。

ウィルクス家は近親婚でも知られていて、アシュリーの婚約者メラニー・ハミルトンはアトランタ在住のまたいとこ（second cousin）である。

「タラ」と「トウェルヴ・オークス」の2つのプランテーションはともにジョージア州クレイトン郡にあって隣接すると設定されているが、2つの邸宅間は馬車や馬で行かねばならないほどの距離がある。

画面16　スカーレットをめぐる男たち—アシュリー、レット・バトラー、その他の「ボー」

男たち1. アシュリー

ウィルクス家の邸宅でスカーレットは、あらためてアシュリーから婚約者のメラニーを紹介される。自分こそがアシュリーを愛していて結婚相手に相応しいと信じているスカーレットにはメラニーが疎ましく思われて仕方がない。

スカーレットがメラニーと挨拶を交わしている間、アシュリーは愛撫するかのように優しくメラニーの肩のスカーフを整えてやる。それをスカーレットは嫉妬にかられ、憤然と見つめる。

画面17　男たち2. レット・バトラー

ウィルクス家邸宅の2階の寝室に続く豪華な階段を登っている途中、スカー

レットは階段の下から色黒で精悍な（35歳位の）男が「まるで下着をつけていない姿の自分を見るかのごとく」じっと見つめているのに気づく。友人のキャスリーン・カルヴァートによると、この男、名はレット・バトラー（船長）でサウスカロライナ州チャールストン（港に南北戦争のきっかけとなったサムター要塞がある）出身。陸軍士官学校で放校処分を受け、チャールストンの令嬢を夜馬車で連れ出してキズモノにしておきながら結婚しなかった（その後、小説では、レットはそのために決闘を挑んだ令嬢の兄を射殺した）などの悪い評判のせいで勘当されて、北部で暮らすことが多かったという。これがスカーレットとレット・バトラーの最初の出会いである。

画面18　男たち3. その他の「ボー」たち

バーベキュ・パーティはたけなわで、スカーレットは招待された（農園主の）年頃の若者たち（これを「ボー」beauという。複数はbeaux）を周りにしたがえて、得意になって彼らの心をもてあそぶ。前方2人の若者はタールトン家の双子ブレントとスチュアート。スカーレットのすぐ右にいるのがメラニーの兄チャールズ・ハミルトン。「ボー」たちはスカーレットに取り入るのに必死だが、彼女は遠くに見えるアシュリーとメラニーが腕を組んで歩く姿に心を沈ませる。

画面19　日時計、スカーレットには午睡をしている暇はない

南部令息（Southern beau「ボー」）の交際相手である南部令嬢（Southern belle「ベル」）たちは、バーベキュ・パーティの後、夜の舞踏会（ball）に備えて、午睡を取らねばならない。付添い（これをシャペロンchaperonという）の黒人召使マミーは「良家のお嬢様（well-brought up young ladies）はパーティで昼寝をするものです、今がその時間です」と命令するが、スカーレットは「サラトガ（ニューヨーク州）に滞在した時にはヤンキー娘が昼寝をしているのを見たことがない」と反論。それに対して、マミーは「今晩の舞踏会にヤンキー娘は誰も出席しない」とやりこめる。この午睡はいわゆる「シエスタ」と呼ばれる、スペインなど熱帯地方の国々で午後の一番暑い時刻に行われる習慣。アメリカ南部ジョージア州にもあったことが窺える。

午睡の時刻を示す日時計（このスナップはスクリプトにない）。針の影は3時と4時の間を指している。その下に“DO NOT SQUANDER TIME. THAT IS THE STUFF LIFE IS MADE OF”（「時間を無駄にするな。それこそ人生を作り上げているものなのだから」）の教訓が刻まれている。これはベンジャミン・フランクリン（Benjamin Franklin,1706-1790）の『貧しいリーチャードの暦』（*Poor Richard's Almanack*、*June 1746*）にある“Dost thou love life? Then do not squander time, for that's the stuff life is made of.”からの引用。スカーレットは（昼寝などして）時間を無駄にしていることはできない。この時間にもアシュリーに会って、愛していることを告白せねばならない。

画面20　夜の舞踏会（ball）に備えて、一斉に午睡を取る「サザン・ベル」（南部令嬢）たち

「サザン・ベル」（Southern belle南部令嬢）とは、主として「オールドサウス」の上流階級（農園主）の娘たちのことをいう。彼女たちは女性としての礼儀正しい規範に従わねばならない。その特色は肉体的な美しさよりも身につけている魅力にある。結婚が彼女たちの最終目標である。スカーレット・オハラもメラニー・ハミルトンも、そして、スカーレットにとっては母のエレンこそがサザン・ベルであったから、同じサザン・ベルといっても、その性格や年齢はさまざまである。

画面21　南部同盟（the Confederacy）の男たちの傲慢な議論

サザン・ベルたちが階上で午睡を取っている間、階下の食堂で南部の男たち

は合衆国連邦（北部）との戦争について喧しい議論をする。

ジェラルド、フランク・ケネディ、チャールズ・ハミルトン、スチュアート・タールトンなどの意見は「われわれはおせっかいなヤンキーの侮辱に十分我慢してきた。彼らの賛否に拘らず奴隷制を維持する。われわれはサムター要塞を砲撃した以上、戦争を免れない」、「リンカーンを屈服させよう」、「南部人1人はヤンキー20人を負かすことができる」、「1回の戦闘でカタを付けてやる。紳士は烏合の衆より強いから」という勇ましいものであった。騎士道を尊ぶ南部紳士は乗馬や射撃に長けていて、旧来の戦闘でなら敵を圧倒する自信があった。

アシュリーの意見はそれほど勇ましくない。「自分はジョージア州が戦うなら、行動を共にするが、父と同じ意見で、できることならヤンキーはわれわれが連邦を離脱する邪魔をしないでもらいたい。この世の多くの悲惨は戦争によって引き起こされてきた。戦争が終わってしまえば何のための戦いだったか誰にもわからなかっとということになる」という。

南部諸州は合衆国連邦　(the Union) から「離脱・脱退」して（これをthe Secessionという）新しい国「南部同盟（連合）」(the Confederacy) を作って独立しようとしたが、リンカーン大統領は武力でこれを阻止しようとした。これが南北戦争である。ここでは「ヤンキー＝北部＝合衆国連邦（リンカーン大統領）」である。

少し離れて彼らの意見を皮肉な目で聴いていたレット・バトラーは、北部に滞在した経験があると理由で、意見を求められる。「勇ましい言葉だけでは戦争に勝てない。南部には砲兵工廠1つすらない。しかるに、ヤンキーは工場、造船所、炭鉱、わが港湾を封鎖しわれわれを餓死させる海軍力を備えている。われわれにあるものといえば、綿と奴隷と、そして、傲慢」というのが彼の意見であった。（参考資料「1860年の北部(Union)と南部同盟(CSA)の比較」を参照）

これを聴いて、勇ましい若者の代表チャールズ・ハミルトンはレット・バトラーを南部を侮辱する者とみなして、決闘を挑む。レット・バトラーはそれには応じず、詫びを入れてその場を去る。

アシュリーはレット・バトラーが射撃の名人であったからこそ、わざと決闘に応じなかったのだと説明する。もしレット・バトラーが決闘に応じていたなら、ハミルトンは確実に命を落としたに違いない。騎士道を尊ぶ「オールドサウス」文明には「名誉」を重んじ、侮辱されるとすぐさま「決闘」（duel）を挑む風潮があった。

参照資料

「1860年の北部（Union）と南部同盟（CSA）の比較」

Comparison of Union and CSA, 1860

	Year	Union	CSA
Population（人口）	1860	22,100,000（71％）	9,100,000（29％）
Free（自由民）	1860	21,700,000（81％）	5,600,000（19％）
Slave（奴隷）	1860	400,000（11％）	3,500,000（89％）
Soldiers（兵士）	1860–64	2,100,000（67％）	1,064,000（33％）
Railroad miles（鉄道マイル数）	1860	21,800（71％）	8,800（29％）
Manufactures（製造業）	1860	90％	10％
Arms production（武器製造）	1860	97％	3％
Cotton bales（綿花梱数）	1860	negligible（極少）	4,500,000
Exports（輸出）	1860	30％	70％

Chauncey Depew（ed.）, *One Hundred Years of American Commerce 1795-1895*, p. 111; For other data see: 1860 US census and Carter, Susan B., ed. *The Historical Statistics of the United States: Millennial Edition*（5 vols）, 2006.による。

画面22　書斎　スカーレットの告白と失恋

午睡の時間からひとり抜け出したスカーレットは人目につかないように書斎でアシュリーに愛の告白をする。

それに対して、アシュリーは、自分はメラニーを愛し結婚する、その理由は彼女は「自分の血の一部であり、互いに理解している」(she's part of my blood—and we understand each other）からであり、スカーレットを愛することができないのは彼女には自分にない「生きる情熱」(all the passion for life）があるが、「その種の愛は2人の性格が自分たちほどに違う場合には結婚を成功させるに十分でない」(that kind of love isn't enough to make a successful marriage when two people are as different as we are）と述べて拒否する。アシュリーの結婚観は近親婚を旨とするウィルクス家の特徴を表してもいる。

スカーレットはアシュリーに欺かれたと思い彼の頬をぶつ。そして、ひとり残されると、怒りと悔しさのあまり手元にあった花瓶を暖炉に向けて投げつける。

画面23　レット・バトラーの告白

暖炉の前のソファから、割れた花瓶の破片を避けるようにしてレット・バトラーが姿を現わす。彼は驚きの口笛を吹き「戦争が始まったのか」と冗談を言いつつも、「あなたが血の気の薄いウィルクス氏の呪縛から解き離れたときにもう一度お目にかかりたい、彼はあなたのように生きる情熱を備えたお嬢さんに

はまったく相応しくない」（I hope to see more of you when you're free of the spell of the thin-blooded Mr. Wilkes. He doesn't strike me as half good enough for a girl of your passion for living）と告白する。しかし、アシュリーを諦めきれないスカーレットはレットの告白を歯牙にもかけない。

画面24　2組の結婚式、メラニー（とアシュリー）から結婚の祝福を受けるスカーレットと（軍服姿の）チャールズ

書斎を出たあと、スカーレットは、折しもリンカーン大統領の宣戦布告（民兵召集令、4月15日）を耳にした男たちが南軍志願に熱狂するありさまを目撃する。アシュリーに袖にされた憂さ晴らしにスカーレットはメラニーの兄チャールズ・ハミルトンの求婚を受け入れる。

それから結婚式まで「2週間！　平和の時代であったなら、そんな短い婚約期

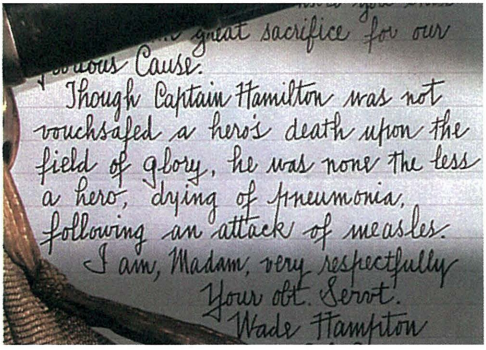
間は、とうていありえなかったにちがいない。礼儀上、1年か、すくなくとも6か月の間隔が、そのあいだにあるべきだった。だが、当時南部は戦争に燃え立ち…昔日のようなテンポは消えうせていた」。「アシュリーの結婚式は、召集がありしだい、いつでも出征できるように、秋の予定が5月1日に早められた。それを知ったスカーレットは、自分たちの結婚式を彼の結婚式の前日に決めた」。「南部諸州は、狂熱と興奮に酔っていた。…青年たちは…入隊をいそぎ…愛人たちとの結婚をいそいだ。郡内でも何十組となく戦争結婚があげられたが、別離を悲しむゆとりは、ほとんどなかった」（小説第1部第7章）。

アシュリーとメラニーの挙式の翌日（小説では前日になっている）、チャールズとスカーレットの結婚式が行われる。花婿やアシュリーは南軍の軍服（グレー色）姿である。

画面25　スカーレット16歳で未亡人となる

そのあとスカーレットは「2月も経たないうちに未亡人となった」。チャールズが戦病死したのだ。（さらに、小説では、彼女は妊娠していて男の子ウエイド・ハンプトン・ハミルトンを出産したことになっている。映画では削除された）。

16歳で結婚、未亡人になったスカーレットの結婚はいくらなんでも早すぎる。IPUMS（国際高精度国勢調査）の資料によれば、1860年代のアメリカ南部白人の平均結婚年齢は男子26.4歳、女子22.9歳だった。



軍から届いたチャールズ病死の手紙

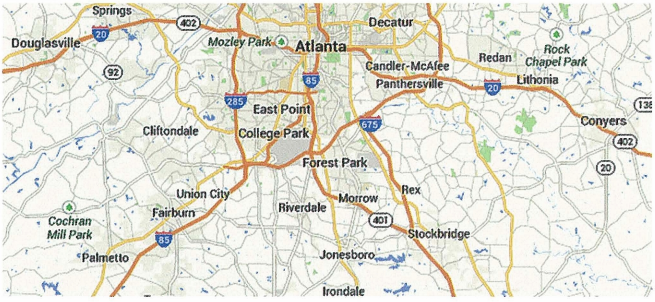
Though Captain Hamilton was not	ハミルトン大尉は
vouchsafed a hero's death upon	名誉の戦死を遂げたとは
the field of glory, he was none the less	申し難いが、それでも
a hero, dying of pneumonia,	麻疹に併発した肺炎で
following an attack of measles.	病死した英雄でした。
I am, Madam, very respectfully,	敬具
Your obt. servt.	
Wade Hampton	ウェイド・ハンプトン大佐
Col.	

（「男の子には父親の指揮官の名を付けるのが当時流行だったので」チャールズの子はウェイド・ハンプトン・ハミルトンと命名された）。

16歳のスカーレットは未亡人として黒の喪服を纏い、社交界に出入りしないことといったしきたりに縛られて意気消沈。見かねた母エレンは気晴らしにアトランタ行きを勧め、スカーレットはメラニーの叔母でアトランタ在住のピティパットの屋敷に身を寄せることになる。

参考資料

（タラの農園が設定されている）ジョーンズボロ（Jonesboro）からアトランタ（Atlanta）までの現在の道のり。その距離25マイル（40キロメートル余り）。



こうして、ドラマの舞台はひとまず「タラ・プランターション」から「アトランタ」へと移る。(以下、次号に続く)。